
鳴ノ海の物語

プラスイオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳴ノ海の物語

【Nコード】

N8632Y

【作者名】

プラスイオン

【あらすじ】

雪国シギアの農村で暮らす少女ミヤは、ある日畑で、根雪に残る小さな獣の足跡をみつけた。足跡を追って山のなかへ入っていくと、そこにはいつも祖父から立ち寄るなど言われていた「鳴滝川」があった。ミヤが川で遊んでいると、一人の少年があらわれた。その少年は、ミヤの亡き母のことを知っているようだ……。

一方シギアの王都では、戦を終えて新しい時代「拓きの時」が始まるうとしていた。<舟渡り>の能力をもつ皇子センリは、妹の誕生式典で、観衆のなかに信じられない光景を目にする。

これは、それから十年が経ったシギアに伝わる〈鳴ノ海〉にまつ
わる物語。

序章 ナリノカミ

序章 ナリノカミ

テルサの山々が眠るころ、レーネの子どもたちは蜜色のやわらかな陽ざしを受けながら、白く染めあがった村を駆けまわる。皆どこからか雪をかきあつめてきては、村の広場に山のように積みあげ、小さな手で丁寧押し固めていく。

やがていくつかの大きな雪山ができあがると、子どもたちは何人かに分かれ、鼻や頬を赤らめながら、大人が数人入れるような穴を掘っていき、最後には見事な雪洞をつくりあげる。

息を切らしながらやってきた子どもたちに雪洞の完成を告げられた大人たちは、藁を持ちより、それをできあがったばかりの雪室の屋根にそっとかぶせていく。そして鳥の巣のように乗せられた藁のうえには、女たちが朝からこしらえたたくさんの菓子や料理が、子どもたちの鋭い視線を受けながら、酒と一緒に乗せられていく。

昼にはご馳走を持ち寄り、日が暮れるまで男たちは酒を飲み、女たちはたわいのない話をする。

子どもたちもご馳走を食べたり、雪玉を投げあつたりして冬の短い一日を過ごす。

やがて日が沈み空が薄闇に包まれると、雪洞には火が灯され、雪深い村は月の下で淡い光を放ちだす。

夕食を終えた子どもたちは再び村の広場に集まり、ハイの木でできた拍子木を打ちながら ナリノ唄 をうたい、村中の田や畑を練り歩く。

これは雪国シギアの、のどかな農村に古くから伝わる祭り事だ。

小正月のその日、三才になったトビもようやくミヤの許しを得て、

村の子どもたちと一緒にになり、雪洞づくりに汗をながしていた。

トビは去年までは、自分より背の高い子どもたちが協力し合って雪洞をつくりあげていくのを、ミヤの隣で目を光らせながら見ていた。

やんちゃな男の子たちが仕事を放りだし、雪玉をつくって投げあいはじめると、トビの手はいつも、ミヤの手から必至に離れようとした。

ところが、雪玉を投げあっていた子どもたちが大人たちに注意されると、離れようとしていたトビの手はとたんにおとなしくなり、ミヤの手を握り返してきた。

そんなとき、ミヤは心の底から我が子を愛おしく思った。いつかはトビも、大人たちに注意されようが、そんなことも気にせずはしやぎまわっているようになるのかと思うと、そんなすがたを待ち遠しく思う一方、ずっとこのままできてほしいと思うのだった。

「ちゃんと、お隣のシーヤちゃんの言うことを聞くのよ。それから、危ないから川へは近づかないでね」

いまにも外へ飛びだしそうな小さな背にむかって、ミヤが言った。するとトビは振りかえり、ミヤの不安そうな目を見てにっこり微笑むと、行ってきますと言いながら、踵をかえして外にでた。

トビが開け放った戸のむこうから、温かな光がさしこみ、ミヤを包んだ。

(ギン……)

ふいに、全身になつかしい温もりを感じ、ミヤはそっと目をとじた。瞼の裏で、一人の少年がぼんやりとすがたを現わした。透き通るようなその瞳は、つよい光をたたえている。

(あのとき、わたしがちゃんとあなたの言葉を受けいれていれば……)

ミヤは、大きく息をついた。ふっと、白い靄が広がった。

(あのとき、あの瞬間に戻れたなら……)

そう思いつづけ、もう十年が経つ。

耳をすませば、遠い彼方から笛のように高く細い音が、野山を越えて響いてくる気がした。とても切なく、哀歌にも聞こえるその音が。

第一話 ミヤとギン

第一話 ミヤとギン

雪解け水が野山を潤しはじめた長い冬の終わり、ミヤは畑のそばの根雪に残る、小さな獣の足跡をみつけた。まだ開きかけの、ユリの蕾の形をした細くて長い足跡だった。

「それは、ソフ（ウサギ）の足跡だな」

小さな足跡を、目を凝らしてじっと見つめていたミヤのうしろから、日に焼けてしわだらけの顔が覗かせた。

ミヤはオウキのほうを振りかえって、目を輝かせた。

「この足跡をたどったら、ソフに会える？」

オウキは顎をなでながら少し考えると、しわがれた声で言った。

「そうだな……会えるかもしれないな」

その言葉を聞いて、ミヤは手に持っていた農具を放りだした。そしてオウキにすぐもどると一言告げると、足跡が伸びていく山のなかへと入って行った。

足跡をたどりしばらく山のなかへ入っていったとき、ミヤは足を止めた。

（ない……）

ミヤが追っていた小さな足跡は、根雪とともに途切れてしまい、辺りを探してもどこにも見当たらなかった。

ミヤが立ちつくして辺りを見まわしていると、かすかに水の流れる音が聞こえてきた。いつも、オウキに近寄るなと言われていた、鳴滝川のあるほうからだった。

（わたし、もう十才だもの。川遊びだって平気よ）

ミヤは心のなかでそう言い訳すると、何かに導かれるように、鳴滝川のほうへ歩きだした。

一歩一歩ゆつくりと進んでいくと、次第にその音は大きくなり、やがてミヤの目の前に昼さがりの陽を浴びて光りながら、うねるように流れる水面がすがたを現わした。

（これが、鳴滝川）

思っていたよりも浅く緩やかに流れるその川を見て、ミヤはにと笑みをうかべた。

靴を脱ぎ、袖をまくりあげ、ミヤはそっと冷たい水のなかに足を入れた。透き通った水が、ミヤの日に焼けた細い足をなでて次から次へと流れていく。

足を動かせば、小さな魚が底に沈む小石の陰からすつとでてきて、また見えなくなった。

「これ、きみの靴？」

時間が経つのも忘れて小石を踏みながら川をのぼっていたとき、ふいにうしろから声がしてミヤは振りかえった。

草が生い茂る川岸に、濡れた白い靴を持った少年が、こつちを見て立っていた。

「あ、わたしの靴！」

ミヤは少年の持っている靴を見て、ぱつと頬を赤らめた。

「いいよ、ゆつくりで。走ると危ないから」

いそいで駆けよるミヤに、少年は穏やかな声で言った。

靴をうけとって礼を言っていると、ミヤは少年に気づかれないように小さくため息をついた。

（流されたのかな、ずぶ濡れだ……）

そんなことを考えながら、ミヤがうつむいたままぼんやりしていると、少年が言った。

「川遊びは好き？ その靴が乾くまで、一緒に遊ぼうよ」

ミヤはそれを聞いて、一瞬オウキの顔が頭にうかんだが、

（ちよつとだけ、靴が乾くまでだけ）

と、また心のなかで言い訳をすると、少年にむかって笑顔でうなずいた。

「わたしはミヤっていうの。あなたは？」

濡れた靴を持って川をのぼりながら、ミヤは横で並んで歩く少年に言った。

「素敵な名前だね。ぼくは、ギン」

ミヤは照れ笑いをうかべながら、ギンの瞳を見つめた。この川の水のように透き通り、陽の光をうけて輝いている。自分よりも少し背が高く、細い手足は雪のように白い。見るからに、身体が弱そうだった。

「わたし、毎日おじいちゃんの畑仕事を手伝っているから、こんなに黒くなっちゃった」

ミヤがぺろっと舌をだしてそう言つと、ギンは目尻にしわをうかべて笑つた。小柄で、しわをうかべて太陽のようにやさしく笑う顔は、オウキそっくりだった。

ミヤはオウキやソフの足跡の話しながら、しばらくギンと川をのぼっていった。

「ここをもう少しいくと、滝壺があるんだ。滝壺は危ないから、そろそろ引き返そう」

急に、ギンが川上を見つめながらそう言つたので、ミヤは口をとがらせた。

「ギンは、おじいちゃんと同じようなことを言うのね。大丈夫よ、少しなら。わたし、もう十才だもの。ギンも行つたことあるんでしよう？ わたしも見たいわ、滝壺」

ミヤがそう言つと、ギンは足を止めた。そして、まっすぐとミヤの目を見ると、

「だめだよ、危ないんだ」

と表情のない顔をして言った。

ミヤがギンから目をそらし、川上のほうに目をやると、遠くのほうから水がどつと落ちる音が聞こえてきた。そうやってしばらく黙って水の音を聞いてから、ミヤは洪々、

「わかったわ、行かない」

と膨れた顔をして言い、いそいそと川をくだりはじめた。

機嫌を損ねるとつい早足になってしまいうミヤは、何度も滑って転びそうになってしまった。そしてそのたびに、うしろを歩いていたらギンに身体をささえてもらい、助けてもらった。

ミヤの顔は転びそうになるたびに恥ずかしさで赤くなり、気がついたころには、ギンと目を合わせられなくなってしまっていた。

「こんなところまで送ってくれて、ありがとう」

ギンのうしろで夕日に照らされて黄色く光っている山を見ながら、

ミヤは言った。

「きみのおじいさん、ずっと心配して待っていたみたいだね」

(え?)

ミヤがうしろを振りかえると、畑の隅で座っているオウキのすがたが小さく見えた。

「もう、さきに帰っていていいのに。おじいちゃんたら」

オウキはミヤに気づいたのか、手を高くあげて大きく振ってきた。

ミヤもあきれ顔をうかべながらも、手を振りかえした。

「ギンは、一人で大丈夫？ 暗くなると危ないでしょう？ おじい

ちゃんに頼んで、一緒に送ってあげる」

振りかえってそう言うと、ギンはにっこり笑って首をふった。

「大丈夫だよ。それより早く、おじいさんのところへ行つてあげてよ」

夕日に照らされて、ギンの顔も山のように黄色く輝いていた。

ミヤはすこし戸惑ったが、ギンがオウキのほうを気にかけていたので、少し待っていて、と言うと、いそいでオウキのほうへ駆けていった。

歩きなれた山道をくだっていくと、だんだんと小さくぼやけていたオウキの顔は、はっきりと見えてきた。ずっと顔をほころばせて、こっちを見ている。

「ごめんなさい。足跡が遠くまでつづいていたから、遅くなつてしまったの」

ミヤはオウキのもとへ着くと、まず言い訳をして、それから「男の子と会つたの」

と言つて、来た道を振りかえつた。

「そうかい、それはよかつた。なかなか帰つてこないから、心配していたんだよ」

オウキが隣でそう言っているのを聞きながら、ミヤは山のほうを見つめた。

(……おかしいな、もう帰つちやつたのかな)

しかし、たしかにいるはずのギンのすがたはどこにも見えず、根雪の足跡のようにミヤの視界から消えてしまつていた。

横でソフは見つかつたかと聞いてくるオウキの声で我にかえり、ミヤは首をふつて笑つた。

「ううん。でも、また今度、会えるといいな」

「ミヤはほんとうに、おかしな子だよ」

ミヤと炉を囲み、きつね色に焼かれて香ばしいにおいしているカジ(イノシシ)の肉にかじりつきながら、オウキは言った。

ミヤは冗談だと言つて笑つているオウキを、きつとにらみつけた。オウキは、いつもこの言葉を口にする。だから、ミヤにはオウキが本気で自分をおかしな娘だと思つていることくらい、もうとつくに気づいていた。

けれど、そんなオウキをにらみつけている自分でも、そう思うことはあつた。自分はどこか、人とは違うということに、ふとしたことで気づかされるのだ。しかしそのたびに、きつと遺伝なのだと思ひこみ、ふかくは考えないようにしていた。

ミヤは、自分の両親の顔を知らない。物心がついたころには、すでにこの古びた家で、オウキとふたりだけで暮らしていた。だから、ミヤはオウキを自分の親のように慕つていたので、五才の誕生日、

はじめて真実を告げられたときは、自分でもすぐにその話を受け入れることはできなかった。

ミヤのほんとうのおじいちゃんは、わたしじゃないのだよ。まだ幼かった自分が真剣な目をしたオウキに言われた言葉が、ミヤの耳の奥でこだました。

それは一瞬で親から突き放されたような、そんな言葉だった。

ミヤは泣きながらオウキにしがみつき、それはどうしてかと問いかけた。

するとオウキは、やはりまだ言うんじゃなかった、というような顔をしながらも、ミヤを落ち着かせ、ゆっくりと丁寧に話しはじめた。

朝から空を覆っていた分厚い雲が消え、ようやく雨があがった夕暮れ、畑仕事の帰りにミヤを見つけたこと。人里離れたあぜ道で毛布に包まれ、一人置き去りにされていたその乳飲児は、なぜか泣きわめいて親を呼ぶのでもなく、にこにこ笑っていたということ。それがどうしても、不思議に思えてどうしようもなかったということ。そして気にかかり、とりあえず連れ帰ったその日が、ちょうどいまから四年前だということ。ただ、いまはミヤをとっても愛していると……それらすべてを、遠い目をしながら語ってくれた。

「わたしのお父さんやお母さんも、おかしな人だったのかな」

ふてくされた顔をしながら、ミヤは言った。

オウキは熱いお茶をすすり、歯にはさまった肉の筋をとろうと口をもごもごさせながら、低い声で唸った。そして首をかしげると、

「そつだなあ……」

と言葉を濁した。

「でも、きょうはたしかにその男の子と、山のなかで遊んだのよ。嘘じゃないんだから」

壁の隙間を通り入ってくる風に吹かれ、ときおり小さく揺れている炉の火を見つめながら、ミヤは昼間会った少年を思いだした。

風に揺れてさらりと流れる黒髪、透き通り輝く瞳に、目尻にしわ

をうかべてやさしく笑う顔。落ち着いた声、白く細い手足……。まるで、ギンは川のようにだった。太陽のように笑うのだけれど、ずっと冷静で、まっすぐ川上を見あげていたギンの背には、なぜか冷たいものも感じた。

名前しか聞いていなくて、年も家がどこかもなにもわからない少年だったけど、またいつかどこかで会えるような気がして、ミヤはその日が楽しみになった。

（今度は、なにを話そう）

そんなことを考えながら寢床に入ると、ミヤはすぐに、すやすやと深い眠りに吸い込まれていった。

翌朝、ミヤは、雨が激しく大地を打ちつける音で目をさました。

オウキがたてつけの悪い重たい戸を開け、降りしきる雨を見つめながら、田畑を心配している声が聞こえてきた。

天気の良い日はもちろん、少しの雨でも外へ出て、日が暮れるまで田畑にいるオウキは、このような天気の日はずっと薄暗い家のかでじっとしている。お茶をすすったり、農具を磨いたり、ときには一日中寢床に横になっていることもあり、見ていてとても退屈そうだった。

晴れていれば時々このどかな農村の家々を一軒一軒まわり、問診にやってくる医者たちも、きょうのような雨の日には訪れない。子どもも外で遊べないから、雨の音だけが延々と聞こえてくる。きょうのレーネの人々は、静かに一日を終えそうだった。

ところが、ミヤは違った。ミヤは寢床から跳ね起き、壁に掛けてあった蓑を頭からかぶると、一目散に冷たい雨の降る外へ飛びだした。

ミヤは、夢を見た。双子池で、まだ子どものソフが溺れる夢だった。

（あの池は、たぶん濁り池のほうだ）

泥を跳ねながら、ミヤは夢中で村の外れのほうへと駆けていった。

長い坂をくだり、滑って転んではまた立ちあがり、息を切らしながらひたすら走った。

少し雨が弱まったとき、ミヤは濁り池と七色の池が並ぶ、双子池へとたどりついた。どちらの池も水かさが増し、土色に濁っていた。ゆっくりと濁り池のほうへ行くと、土色の池のそばに、白くて丸いなにかがたたずんでるのが見えた。

(ソフだ……よかった、間に合った)

ミヤは足元に落ちていた太くて長い木の棒を手にとり、足音をたてて気づかれないように、そっとソフのほうに歩み寄った。

その刹那、目の前が真っ白になり、直後に大地を揺るがすような大きな音が、大気に轟いた。

(あ、だめ……！)

激しい音に跳びあがったソフは、そのまま水しぶきをあげ、濁り池のなかへと滑り落ちてしまった。

ミヤはいそいで水のなかでもがいているソフを助けようと、草を踏み倒して前へ進みでた。しかしそのとき、やわらかく濡れた草は深く沈み、ミヤの足元は崩れてしまった。

高い悲鳴をあげながらミヤは一気に池のなかへと吸い込まれていき、口のなかには細かい草の混じった泥水が、容赦なく流れ込んできた。

(おじいちゃん、助けて)

遠のいていく意識のなかで、ミヤは必死にオウキの名を呼んだ。やがて視界は真っ暗になり、ミヤは冷たい水のなかで、意識を失ってしまった。

ミヤが意識をもどしたのは、青空の下に広がる、静かな森のなかだった。あの大雨は嘘のようにあがり、空は澄み渡り、雲ひとつなかった。

ミヤがゆっくりと起きあがって辺りを見まわしていると、遠くのほうから誰かが自分の名を呼んでいるのが聞こえてきた。

(おじいちゃんだ)

ミヤはすぐに立ちあがり、なつかしく聞きなれたその声のするほうへと走りだした。

森をぬけると、そこはオウキとミヤの畑が遠くに見える、あの、ギンがすがたを消した場所にでた。あのときと同じように、オウキは畑にいて、ミヤに気がついて手をふっている。

ミヤは乾いた蓑を脱ぎ、オウキにむかって大きく手をふりかえした。

(もしかしたら、ギンが助けてくれたのかもしれない)

心の底で、ミヤはふと思った。ソフは、大丈夫だっただろうか…

…。
うしろを振りかえると、青く茂る山々は夕日を浴びて、また黄色に輝いていた。濡れた土のおいは、たしかに雨が降った後の、あのおいだった。

夢ではない。ミヤは、そう思った。たしかに、濁り池へ行き、池に落ちるソフを見た。そして、そのソフを助けようとして、自分も池に落ち、そのまま意識を失ってしまった。その出来事はすべて、たしかにさつきまでの出来事だ。

(ありがとう)

ミヤは自分を救ってくれた、見えないそのなにかに、礼を言った。そして踵をかえすと、背伸びをしながらこっちを見て待っているオウキのもとへ駆けだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8632y/>

鳴ノ海の物語

2011年11月26日00時55分発行